

(6) 諫早市江の浦地先におけるクロメ、ヒジキの増殖 (2014~2016年)

キーワード：クロメ種苗生産、ヒジキ天然採苗、ウニ駆除

【背景】江の浦地先では、クロメ場やガラモ場の四季藻場が形成されていましたが、近年は藻場が減少し、浅場ではアカモクやワカメが主体となり、藻場の形成時期が短くなる傾向にあります。そのため、2009年に“江の浦地区藻場を大切にする会”が発足し、積極的な磯焼け対策が行われています（平成29年度長崎県漁業協同組合連合会長賞 浜・地域の魅力を活かした漁村の活性部門受賞）。

【方法】県南水産業普及指導センターの指導により、クロメ種糸の生産とヒジキの天然採苗が行われました。クロメでは、採苗後の種糸を港内の筏で中間育成し、翌春に成長した幼体(図2-28A)は、種糸を巻き付けた枠ごとセメント製ブロックの基質に固定して海底に設置されました。ヒジキでは、自然石を用いた天然採苗が行われ、着生が確認された基質はヒジキが少なくなった場所へ移設されました(図2-28B)。また、クロメの移植場所では、ウニ駆除が継続的に行われました。

【結果】クロメ種糸では、2014年320m(種糸5枠)、2015年3,000m(50枠)、2016年1,000m(51枠)の生産に成功し(図2-28A)、漁場へ移植されました。2014年に採苗し移植されたクロメは、2016年1月には成体となり、2015年に移植した種糸3,000mと合わせ、クロメ群落の形成が確認されました。

ヒジキでは、設置した自然石のうち、幼体の着生が確認されたのは、2015年70%、2016年78%で、図2-28Cのように多数の幼体が着生したものがああり、造成面積でみると、それぞれ3.4 m²、11.7 m²で、ヒジキの着生場が造成されました。

【考察】地元の熱心な取り組みと県南水産業普及指導センターの指導により、クロメの種糸作りやヒジキの天然採苗の成功は県内でも例のない事例と言えます。特にクロメの種糸作りは、2016年に

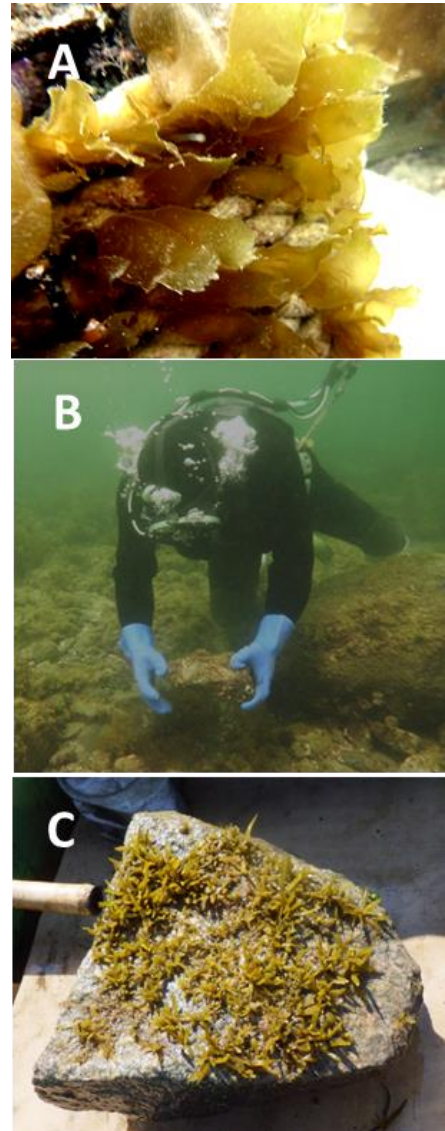


図 2-28 江の浦地先における藻場回復の取り組み

A: クロメ種糸、B: ヒジキ増殖用基質の設置作業、C: 天然採苗で増殖用基質上に着生したヒジキ幼体

は諫早市池下地区でも技術の導入が図られ、種糸 1,000m (種糸 25 枠) が生産され、地元への技術の定着が期待されます。ただ、技術の導入にあたっては、クロメでは秋～冬の間育成を行う場所や施設が必要であり、中間育成期間中の付着物を落とす洗浄作業など管理体制も整えておく必要があります。

ヒジキの天然採苗では、基質の安定と十分量の母藻が必要となり、波浪の影響など漁場に応じた基質の選定や設置方法の検討と母藻の成熟状態を確認して行う必要があります。基質への採苗は自然任せとなるので、全ての基質に均等に高密度で種を付けることは容易ではありませんが、母藻設置作業と比べ、母藻を採取して設置する作業や母藻となる群落を傷めることがないこと、クロメのように中間育成を行う手間が省けることなど、メリットもあります。天然採苗は海藻を増やす“要素技術”の1つで、ヒジキ以外の海藻にも利用できる方法です（第3章3-1、p.52参考）。